



二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

小説 水坂早希

挿絵 ひぐちいさみ

第一話 即席魔法少女

第二話 公開陵辱

第三話 十四番目の魔法少女

第四話 淫虐の闘技場

006

082

155

180

## 登場人物紹介

Characters



くすのき さえ  
**楠 沙枝**

エミットに見込まれて、違反者を迎え撃つ即席魔法使いに選ばれた、白樺学園に通う少女。

にしじま しょうこ  
**西島 翔子**

沙枝の親友。上品な物腰のお嬢様。

**エミット**

人間界の違反者を撃退するという使命を帯びて、沙枝の前に現れたエーテルランドの妖精。

**ルールアン**

人の思念を吸うために、エーテルランドより人間界に現れた女性型の違反者。

**バルドイ**

違反者の一人。筋肉質の巨漢。

滑稽なほど身体が震えた。ルールアンがさらに笑う。

「そんなに怯えなくても大丈夫よ。日が完全に落ちたら家に帰してあげるから。続きは明日ね。回復した沙枝ちゃん思念を吸いがてら、また虐めてあげるわ」

まだ日が暮れるまで四時間はある。それに今日、見逃してもらえても、また明日戮られてしまうのだ。

風が数度冷え、目の前に重々しい闇が降りた。

☆

「わかったら、さっさと立ちなさい」

沙枝は鼻をすすり、無言でかぶりを振った。

「仕方がないわね。それじゃ、沙枝ちゃんがすぐに立ち上がる魔法をかけてあげるわ」魔法と聞いて、肩でふわりと波打つ淡桜色のフリルがはねる。

「さて。種も仕掛けもありません」

差し出された魔女の手の平が発光し、丸めたティッシュのような透明な布玉が現れた。

「この、グチャグチャに濡れた布、なんだと思う？」

スカートの中がヒヤリとする。沙枝は一拍遅れて、その布玉が尿と恥液にまみれた自分のショーツだと気づいた。さらに真っ赤になって立ち上がった。

「い、いやっ……か、返してくださいっ！」

ルールアンが野花でも嗅ぐように、布玉へ端正な鼻を寄せる。

「とつても、いい匂い。沙枝ちゃんの、おしつこと蜜と汗の甘い香りがするわ。食べちゃいたいくらい」

「そんな匂いなんて、嗅がないでくださいっ！」

混乱した沙枝は、ノーパンになっていることも忘れ、ルールアンに飛びかかった。スカートを膨らます淡桜色のフリル花が太腿に押され、お尻の曲線が露わになる。伸ばした沙枝の手をかわし、ルールアンがショーツを高々と掲げた。

「駄目よ。沙枝ちゃんが恥ずかしい液でベトベトに汚した跡を、みんなにもよく見てもらわないとね」

あやとりで作った「橋」でも見せるように、頭上でショーツを千切れんばかりに広げられた。透明な布が張りつめ、粘液が滴る。自らの陰唇が伸ばされて大勢に見られている錯覚がして、沙枝の脳裏が熱くなった。

「やつ！ そんなに、広げないでくださいっ……！」

ショーツを取り戻そうと、沙枝は滑稽なほどピョンピョンと飛び跳ねた。羽衣のように軽い極薄のペチコートが幾重にも捲れて膨らみ、薄桜色のフリル花の合間から、ぬめり光るお尻と幼女のように抉れ食いこむ縦皺が、チラチラと扇情的に覗く。

周囲から下卑た歓声が沸き、口笛が吹かれる。

「沙枝ちゃん。下着を穿いてないの忘れてない？」

沙枝はようやく気づき、心の底から真っ赤になった。

スカートを押さえようとしたところで、ルールアンがパチリと指を鳴らす。

勝手に動き出した両手首が背中で交差させられ、リボンの結び目の中に入れられる。ピンク色をした可愛らしい蝶リボンの形はそのままに、沙枝は後ろ手で拘束されてしまった。恥部を隠すべき両手を封じられ、潤む瞳に怯えが走る。

「次の魔法よ。たっぷり恥ずかしがりなさい」

低く笑ったルールアンが手を閃かせると、歩道全体から魔法の風が吹き上がった。背中であわりと髪房とリボン布が膨らみ、白いスカートのまくれ上がる。弱い風だったが、幾重ものペチコートが、全て腰で水平に煽られたまま静止してしまった。

沙枝の裸の恥丘と柔らかそうな尻が、ついに衆人環視へ晒される。

周囲が一層どよめき、恥丘とお尻が隅々まで視線で焼かれていく。視姦されている幼すぎる恥部を隠そうにも、後ろ手に拘束する蝶リボンはビクともしない。

「やっ、やあつ、いやああつ！ 見ないでください」

沙枝は顔中を朱に染めてその場にしゃがんだ。可愛らしくはためく淡桜色のフリル花の下で、尻房が淫猥に開き、薄桃色の肛門が横に口を伸ばす。幼い肉蓋も開き、ゴポリと大量の蜜が粘り落ちた。失禁したかと思うほどの迸りだ。

侮蔑を帯びた女の声が、伸び広がった陰部に刺さる。

「うわ、最低っ。あの子、今度はなに漏らす気なの？」

沙枝は泣きそうになり、用を足すときの羞恥姿勢から、バネ仕掛けのように立ち上がった。きつく膝を閉じ合わせると、今度は陰唇の縦皺に、膨らんだ陰核がキュッと挟まれてしまう。包皮からぬぷりと、敏感すぎる肉豆が剥け飛び出す。

「——んんっ……！」

背筋を反らせ、すぐに膝の力を抜いたが、幼すぎる陰唇は肉豆を美味しそうに食い締め、そのまま開いてはくれない。羞恥を感じながらも、震える膝を恥ずかしく広げていったが、陰核は二つの陰肉に挟まれたままだ。

恥丘の前方に陣取った中年の男が声を上げた。

「いいぞ、露出狂の嬢ちゃん。見ててやるから、もっと豪快に脚開きなよ！」

脳裏がさらに真っ赤になり、再び膝を合わせた。勢いよく閉じてしまったために、また肉豆が縦皺に潰されてしまった。視姦される中で、幼い陰唇がどろりと涎を垂らす。

白いストッキングで締まった脚が極端な内股で震え、中腰でお尻を突き出した体勢のまま固まってしまう。肛門を見られているとわかつているのに、陰核から子宮へジンジンと送られる快感波のせいで、お尻を引っこめることができない。

「……み、見ないで……そんなに見ないでくださいっ」

お尻を撫でるように、背後から若い男が声をかけた。

「安心しなよ！ 沙枝ちゃんの幼女みてーな、おま×こじゃ、誰も中まで見えねえよ！」  
どっと周囲が沸いた。沙枝の心が羞恥で削られる。大きなピンク色のリボンに縛られた  
手首の先で、指が空しく藻掻く。

もはや恥部を隠す術はない。恥丘部分にしかはえていない恥毛が肌に糊付けされてテラ  
テラと光り、そこから股縄のように抉り伸びる肉溝が、あまりの羞恥で、さらに深くきつ  
くなつていく錯覚に襲われる。周囲の視線が一点に集中して、蜜壺内がスプープのようにト  
ロトロと煮こまれていく。

沙枝は大きな瞳一杯に涙を溜め、艶やかな髪を振り乱した。

「もう見ないでっ、風、もう風、止めてくださいっ！」

「遠慮しなくてもいいのよ？ 弱い風だから魔力も使わないし。日が暮れるまで吹いたま  
まにしてあげるわ」

「……そ……んな……このままなんて……やあぁ……」

「ね。こんな、どろどろの下着でも返してほしい？」

「か、返して……返してくださいっ……！」

「じゃ、返してあげる」

ルールアンの手からショーツが消えた。



「さて、どこへ行つたかわかる？」

沙枝は押し黙った。口内に、生暖かい布が転移してきたからだ。

……グッシヨリと濡れた自らのショーツだった。

「——んぶうううつつ！」

気色悪さにすぐさま吐き出そうとしたところで、背後に回ったルールアンに口を押さえられてしまった。

「自分のおしつことおま×この味はどう？ 美味しい？」

「んむうっ、ぶむやあああつ」

「もう。美味しそうだったから、沙枝ちゃんに譲つてあげたのに。せつかくのご馳走なんだから、もっとよく噛み締めて味わいなさい」

首筋に魔法の波を流された。舌が勝手に蠢き、ぬるりと粘るショーツが口内で転がされる。クチャクチャと愛おしげに咀嚼させられ、サトウキビを吸うように布玉の蜜がじゆるじゆると吸い出される。尿と蜜の甘く生臭い味が、口の中一杯に広がる。鼻で呼吸するたびに、自らの甘酸っぱい雌匂が鼻腔粘膜を刺激する。

脳が痺れるほど堪能させられたところで、喉奥にどろりと溜まった恥液がコクコクと飲みこまされていく。沙枝は気が狂いそうになった。

「やっんぶ、汚い。ひやめて、んぶゆ、くださいっ！」



「ほら、わりに喋ると舌を噛むわよ。それとも、もう十分味わった？ 出してほしい？」  
沙枝は涎を垂らしながら帽子の角を縦に揺らして、もう無茶苦茶に頷いた。

「じゃあ、出してあげる」

ようやく口内からショーツが消え失せた。が、

「さあ、沙枝ちゃん。次の移動場所を当ててみて？」

下腹がキュルルと鳴った。直腸内に転移してきたのだ。

腸管に大きな異物が挟まっている感覚に、背筋が総毛立つ。

「いやああっ！ と、取って、取ってくださいっ！」

「わがままな子ね。こんなご馳走を、お尻の口で頬張ってるのよ？ もっと喜ばさい」  
ぬめる薄桃色の窄まりに、魔女の人差し指がっぷりと後ろから突きこまれた。

「やああっ、も、もうそんなとこに、指いれないでっ」

「取ってほしいんでしょ？ いい子だから暴れないの」

人差し指が根本まで埋まり、右に左にと執拗に腸壁をこね回して探索を開始する。

最も不浄な部分である排泄口を、他人の指で直に觸られているのだ。括約筋を引き締め  
るたびに、おぞましさと恥ずかしさに襲われ、沙枝は泣き叫びそうになった。

「見た目が綺麗だけじゃなくて、上質のゴムみたいに柔軟なお尻の穴ね。これならちよ  
つと調教しただけで、すぐに男の肉がくわえられそうね。……さあ見つけたわよ」

腸奥で指が曲がり、布端に引っかかる。透明にぬめるショーツが一気に抜き出された。「きゃううううっつ——！」

他人の力で強制排泄させられた汚辱感がして、沙枝の背筋が反り返った。

☆

後ろ手に縛るリボンと浮かぶ淡桜色のペチコートの下で、裏返ったままの肛門をヒクヒクと膨らませ、沙枝は真つ赤な顔で荒い息をついていた。

抱きついていたルールアンが、優しく腰を引き寄せてきた。豊かな胸に埋まる沙枝の顔が上向かされ、迫ってきた唇が触れ合いそうになる。魔女の表情がうっとりとなるが、切れ長の双眸だけは氷のように冷ややかだった。沙枝は黒々とした瞳を震わせた。

「ね、沙枝ちゃん。お尻と上の口、どっちで味わったほうが美味しかった？ 美味しかったほうに、もう一度じっくりと食べさせてあげる」

答えられるはずもなく、沙枝はうつむいた。

「答えないなら、また上の口に戻すわよ？」

より一層汚れてしまったショーツを、口へ戻される恐怖に怯えた沙枝は、弱々しく羞恥の言葉を発した。

「……お尻の、ほうが……おいし……かったです……」  
言ってしまったから嵐のような恥ずかしさに襲われ、長い髪をふるふると振った。

魔女が微笑み、唇で顔を上向かせるようにキスをした。瞳が愛娘を見るように弛む。

「偉いわ。沙枝ちゃんも、ようやく素直になれたのね。それじゃ、存分に味わいなさい」

透明にぬめるショーツの布端を、薄桃色の肉皺が集束する窪みに噛ませ、人差し指でクチュクチュと押しこんでいく。尾骨から背筋へと、悪寒が駆けのぼっていく。

またも沙枝は自らの穿いていたショーツを、直腸内へ完全に収められてしまった。

「どうして……そんな、恥ずかしいとこばかりっ……」

弱々しく非難の声を上げる間にも、ルールアンは沙枝の股間を重点的に愛撫してきた。

恥丘側から手の平を滑り入れ、肉蓋をクチュリと開き、指先で小陰唇のひだを何周も撫で回してくる。膨らんだ陰核を、手の平でヒヨコでも愛でるようにクリクリと転がす。

陰唇への優しげな愛撫とは対照的に、観客へ突き出されたお尻の責めは激しかった。

蜜と腸液で透明に固まったショーツを、押しこんでは排泄させ、押しこんでは排泄させを執拗に繰り返し、肛門を内と外からこすりたてる。薄桃色の皺がどろどろに溶け広がったところで、指先をぐちゃりと二本も埋め、少女の排泄口を縦に横にと伸ばして、噛み締めたショーツを無理矢理に咀嚼させる。

繁華街の真ん中。何十人という野次馬に視姦される中で、お尻を露わにされ、突き出した肛門でショーツを美味しそうに、文字通り食べさせられているのである。

沙枝は魔女の胸に真っ赤な顔をうずめて、悲鳴を押し殺した。

後ろ手にされた腕を隠す長い髪が震え、赤い靴がカタカタと音を立てる。唇を引き結んで肛瘡を耐え忍ぼうとするものの、「きやう、きやう」と媚びる声、涎と共にこぼれてしまう。魔女の身体へ押しつけた乳房の先端が、痛いほど脈動を続けている。

蜜壺が狂ったように、匂い立つ粘液を分泌させる。やや白濁した蜜が股間から垂れ、魔女の手袋を濡らすたびに、理性が一つ一つ確実に削がれていく。

やがて沙枝が絶頂間際の高みに引つかかってしまうと、肛門の責めのみとなった。

観客へ見せつけるように排泄口が割られて裏返され、濃い桃色をした敏感な直腸壁の部分で、透明にぬめったショーツをアナルパイプのごとく苛烈に出し入れされる。

「沙枝ちゃんのお腹の中って、ほんと綺麗ね。透明な腸液しか出てこないわ。よほど健康なのね」

「んあっ、あ、あうっ……くっ……ふあっ……」

「そろそろね。わかる？ 今から沙枝ちゃんはお尻の穴だけでイッチャウのよ？ もう立派な変態ね」

「そ、そんなの、いやあ……はぐっ……もう、もうお尻止めてくださいっ」

「ほら、後ろを見て。沙枝ちゃんの変態になる瞬間を、みんなも見守ってくれてるわよ？」  
沙枝は朦朧となりながらも、怖々と振り返った。

周囲を取り巻く見物人たちは、情欲と侮蔑が入り交じった視線で、少女の排泄口に行く

末を注視していた。男のほとんどが、あからさまに股間を膨らませている。

怖気にも似た羞恥に襲われ、「ひっ」と悲鳴をこぼして魔女の豊満な胸に顔を戻した。

ショーツが三分の二ほど引き出されて止まった。そのまま布を回転させられ、透明な布地が雑巾搾りにされる。嘔み締めた肛門粘膜もクリクリとひねられ、薄桃色の菊皺が極端な渦状に変形していく。

「ひうっ。お、尻が、ねじれる……ねじれちゃうっ」

キリキリと、高みへ強制的に押し上げるネジを巻かれているような、恐ろしい感触。

「さ。エミットみたいに、『イク』って言うのよ？」

そんな言葉は絶対口にしたくなかった。だが、

「言わずに達したら、お尻が壊れるまで続けるわよ」

冷たい眼光を浴びせられ、沙枝の心が震えた。

その心の間隙を見逃さず、凶悪なドリル状に巻かれたショーツがぐちゅりと一気に突きこまれた。肛門の皺が奥へめりこみ、子宮が押し下がって蜜がごぼりと溢れる。それでも沙枝は、『肛門でイク変態にはなりたくない』とばかりに、魔女の胸にすがりついて堪えた。桜色の唇がパクパクと開く。

だが、ショーツを全部挿入しても、魔女の指は止まらなかった。布を腸奥へ押し進めつつ、中指が突きこまれていく。異物がS字結腸まで達したのがハッキリとわかり、快感で

痙攣する背筋が総毛立つ。指が根本まで埋まり、布が腸の奥まで達しても、まだ突きこみは止まらない。靴が爪先立ちになり、沙枝の身体が完全に浮いてしまう。

ぐちゃりと肛門だけで全体重を支えさせられた瞬間、

「……………イ……………ク……………」

微かな絶頂の合図を口にして、沙枝は生まれて初めて肛門で絶えてしまった。

☆

薄桃色の窄まりから引き抜かれたルールアンの指が、再びパチンと鳴らされた。両手首がようやくリボンの結び目から抜け、抱かれていた身体も解放される。

沙枝は脱力して、冷たい歩道に崩れた正座で尻餅をついた。未だに風を受けているスカートを、のろのろと力なく押さえる。

散々こすられた肛門粘膜が疼いており、まだ指が挟まっている錯覚がする。直腸深くに居座るショーツを排泄しようにも、恥ずかしくて息む気にはなれない。

沙枝はもう心まで汚された気がして、むせび泣いてしまった。水晶玉の中で眠るエミットに助けを求めようと口を開いたが、思いとどまる。

エミットを起こしても、被害者が増えるだけだ。それにすでに彼女は、気絶に追いやられるほどの激しい責めを受けているのだ。これ以上、辛い思いはさせられない。

もうこれは戦いでもなんでもない。一方的な陵辱だ。



ルールアンを倒す術がないならば、せめてこのままエミットを眠らせてやろう。  
陵辱ならば……自分一人が受ければいい。

沙枝は唇を噛み、悲痛な決心をした。

突如、すぐ間近で男の声がした。

「——おい。君たち、どこの撮影会社の者だ」

見上げると、中年の警察官が立っていた。

「ちよつと署まで来てもらおうか。つたく、公衆の面前でこんな撮影なんか……」

「だ、駄目です！ 逃げてくださいっ！」

沙枝が止めるもの聞かず、警官が魔女の肩を掴む。

「うるさいわよ、あなた」

ルールアンが煩わしげに手をはねのけると、警官がボロ切れのように吹っ飛んだ。男の身体が人混みのクッションに落下して、周囲から悲鳴が上がる。

さらに魔女が手を振ると、周囲が半径五メートルの透明な球体に包まれた。透明な壁に押された野次馬が、放射状になぎ倒される。部外者に邪魔されないように、魔女が結界を張ったのだ。

今さらながら状況の異様に気づいたのか、見物人で埋まった繁華街が、別の意味で騒然となり始めた。

☆

傾き始めた冬日はまだ高く、赤く染まる気配もない。

「その男と、その二人。あなたとあなたも。こつちに来て、沙枝ちゃんを取り押さえないさい」

沙枝は帽子の角をはねさせた。

魔女に呼ばれて暗示をかけられたのだろう。五人の若い男が、虚ろな目で結界内に入ってきた。選ばれたはずれの男も、威圧されそうなほど巨漢だ。沙枝は腰が抜けてしまい、四つんばいで逃げようとしたが、両脚を別々の男に掴まれてしまった。

「——ひっ、やっ、触らないでくださいっ！」

ルールアンに操られているのだろう。五人は効率よく沙枝を押さえこんでいく。

白いストッキングで覆われた膝小僧と脛が握られ、膝が曲げられないようにされてしまう。無理矢理ピンと伸ばされた脚が、コンパスのように開かれる。別の男が、上着の腹を持ち上げる。残った二人の男が、両腕を封じつつ、上半身を前に折り曲げていく。

頭に貼りつく赤い帽子から流れる髪が、背中のリボンから溢れて路上に散り広がる。風を受けたスカートとペチコートが腰で裏返しになり、白い裸のお尻が身体の頂点にくる。

沙枝は上体を倒して裸のお尻を後ろへ突き出す、『馬飛びの馬』になったような羞恥姿勢で固められてしまった。固い身体がピキピキと引きつる。

「は、放して、や、やだっ、こんな恥ずかしい格好やだあっ！」

少女の幼い陰唇が突き出され、結界の外で見守る観客がどよめいた。

腰で揺らめく幾重もの淡桜色のフリル花が、お尻を彩る台座のようだ。

羞恥で小刻みに震える柔らかそうなお尻は、刷毛で塗りたくったように白房全体が蜜にまみれ、湯気を立ち上らせている。暴虐の影響でヒクヒクと痙攣した薄桃色の肛門。そこから一直線に抉り下りる肉皺からは蜜がとろとろと溢れ、包皮を根本に捲らせて剥け膨らむ陰核から、光る糸が粘り垂れて歩道にまで達している。

両脚の間で逆さになった清純そうな小顔が震え、恐怖にも似た恥ずかしさが襲ってくる。頭に血が上って、頬が際限なく熱くなっていく。極限の羞恥に苛まれ、歯がカチカチと鳴って、涎がこめかみへと逆さまに垂れていく。

屈んだ魔女が両手で頬杖をつき、恥部へ顔を寄せて、陰唇へ優しげに話しかけてきた。

「もう。せっかく喜ばせようと思って、こんな恥ずかしい格好をさせてあげたのに。ココがこんなに幼く閉じたままなんてね。沙枝ちゃん、本当にいくつ？　こんな幼女みたいなアソコじゃ、彼氏もできないわよ？」

「……い、わないでください……も、もう見ないで……」

魔女の吐息が粘膜に触れ、恥ずかしさが膨らむ。

「せっかくだから、露出狂の沙枝ちゃんがもつと感じられるように、みんなで奥まで広げ

てあげるわ」

ヒクリと跳ねさせたお尻に、男たちの手が四本、左右から食いこんだ。小さな尻房がぐちゃりと割られる。上では肛門が横に伸び、下では幼い肉蓋が淫猥に羽根を広げる。白濁した蜜が、またどろりと固まってこぼれた。白い湯気が立ち、若い雌の甘い香りが湧く。

「やあ、やあっ、お尻、触らないでっ、そんなに広げないでくださいっ、恥ずかしいっ」  
ふつくらとした陰唇を開くと、小さな桜色のひだが一重だけある。そこにポコンと開いた膣口の奥には、ドーナツ状の処女膜が濃い桜色にぬめり光っていた。

「やっぱり処女ね。綺麗な膜が美味しそうに光ってる」

「や、だあ……そんな奥まで……見ないでください……」

恥部の奥の奥まで見られている羞恥もそうだが、見知らぬ男たちに、敏感なお尻の肉を握りしめられているのは、なんとも耐え難かった。

子宮の底まで灼熱して、沙枝は無茶苦茶に暴れた。だが魔法の使えなくなった少女が、屈強な男五人の手から逃げられるはずもない。

「ほらほら、そんなに暴れないの。おとなしくしないと、もつとソコを広げるわよ？」

男の四本の手の平が柔らかい尻房へさらに食いこみ、恥部がグチャリとX字に割られた。指の隙間で、肛門と陰唇の粘膜が白くなるほど広げられる。

「い、やあっ……痛、痛いっ……そんなにしないでっ」

「ほら。ソコを割られたくなかったら、じっとしてなさい。これからは抵抗するたびに、力づくで広げてあげるわよ。わかった？　沙枝ちゃん」

露わになった処女膜の穴から蜜が溢れ、剥け膨らむ陰核の頂点から、歩道へ糸を引いて落ちていく。抵抗を止めようにも、剥き身の陰核へ粘液が伝うたびに、尾骨がヒクヒクと跳ねてしまうのである。

沙枝は後から後から湧き出る蜜を、倒した上半身にまで伝わせながら、必死なまでに尻の動きを止めた。抵抗を止めても、双臀は淫猥に割られたままだ。

沙枝はコンパスのように開かされた脚を震わせ、静かにむせび泣いた。

黒々とした瞳から涙が逆さにこぼれ落ち、足元の蜜溜まりにいくつも波紋が広がった。

☆

「さあ。次の責めはちよつと辛いわよ。覚悟なさい」

鼻をすすって、股越しに潤んだ目を向けると、ルールアンが奇妙な道具を持っていた。

一・五リットルのペットボトル大もある、馬に打つような巨大な注射器だ。先端には針の代わりに、哺乳瓶の飲み口のような柔らかそうなゴムがついている。容器の中を、透明な液体がなみなみと満たしていた。

「これを、たっぷりと飲ませてあげる。大量におしっこをして、延々と射精感を味わってもらうためにね」

沙枝は突き出したお尻を震わせた。注射器の丸い先端が迫ってくる。てっきり口に含まされて無理矢理水を飲ませられるのかと思った。——だが、

くちゆりと先端が、割り広げられた薄桃色の肛門に埋まった。

「ひゃうっ？ ふあっ、な、なに……？」

「見ればわかるでしょ？ 浣腸をしてあげるのよ」

女の子にしては珍しく、便秘になったことすらないが、浣腸くらいは知っていた。

「え？ え？ ど……うして、そんな、ことを……」

訳がわからず混乱した。こんな液体をお尻に注入されてしまったら、きっとすぐに……。見せてしまうだろう究極の痴態がフラッシュした。

ひきつけを起こしたように暴れたが、また尻肉をぐちゃりと引き割られ、おとなしくさせられる。

「心配しないで。これは魔法のかかった薬液だから、排便を促す成分は入っていないわただ……」

魔女の唇が冷たく歪んだ。

「お腹の内容物を無色透明、無臭な液体に浄化して、膀胱へ送りこむ効果があるだけよ。つまり沙枝ちゃんは、今からこんなに沢山のお漏らしができるってわけ。嬉しいでしょ？」  
先ほどの猛烈な射尿感が浮かび、滑稽なほど菌が鳴った。

「あ、無臭にするっていつても、沙枝ちゃん本来の甘い匂いは消えないからね。みんなにもたつぷりと嗅いでもらえるわよ」

逆さに広がる髪を、無言でふるふると揺らす。

「でも、千五百ccもあるからね。排便を促す成分がなくても、さうとう苦しいでしょうね。ちなみに魔法で、尿口と肛門に逆止弁の性質を持たせてあげたから。全部飲みこむまで、一滴も吐き出させてあげないわよ」

「ゆ、許して……ください、そんな恐ろしいこと……」

今からこんな繁華街のど真ん中で、大勢の人に視姦されながら、千五百ccもの浣腸をされてしまうのである。沙枝は心の底から戦慄した。

逃げ出そうにも、五人の男に『馬飛びの馬』の羞恥姿勢で押さえられ、四肢を動かさそうとしただけで、尻肉を力ずくで割られて従順にされてしまう。

情け容赦なく、巨大浣腸器のシリンダーが押された。チュルチュルと直腸内に、生暖かい液体が注入されていく。未体験の強烈な異物感に、沙枝のお尻が跳ねた。

「やあっ、お腹の中に、入って……入ってくるう……」

薬液が射精のようにビュクビュクと、焦らしつつ注入されていく。直腸がすぐに満腹になり、水風船のように真ん丸と膨らむのがわかる。その腸風船の中で、膨らんだショーツが金魚のように泳ぎ始める。

限界かと思った次の瞬間、堰を切ったように薬液が、ジュルリとS字結腸の奥へ雪崩れこみ始めた。

「ひやあつ？ 奥まで、奥まで入り始めたあつ……………！」

上半身を倒している影響で、薬液が腸管を滑り台にして腹の底へと勢いよく滑り落ちていく。その気持ち悪さに喘いでいると、キュルキュルと腹が鳴き出した。

「……………やあ、お、お腹が……………ぐうっ……………」

排便を促す効果はないといっても、腸内に液体を詰められれば、排泄欲が湧くのは当然だ。沙枝の血の気が下がり、浣腸器の尻尾をつけた白いお尻に鳥肌が立つ。

と、腸内深くまで流れ落ちていく薬液が、反応を始めた。

薬液が軟体生物と化したように蠢き、腸管の汚れを隅々までこそげ取っていく。腸壁をひだの奥の奥まで舐められている感覚がして、腰で裏返るペチコートが小刻みに震えた。

「……………なに、これ……………あぐう……………気持ち悪い……………お腹の中が……………全部舐められてる……………」

「効いてきたみたいね。腸を何十人もの男に舐め回されて、汚れを取ってもらってる感じがして、もの凄く気持ちいいでしょ？」

あまりのおぞましさに声も出せないまま震えていると、蠢く薬液が一気に熱を帯びた。腸壁と直腸壁を刺激しつつじわじわと薬液が染み、みるみる膀胱へと流れていく。

「んあつ、ま、前が膨らんで……………また漏れちゃうっ」



膀胱が満腹になり、下半身から力が抜けた。しかし魔法で尿道がピッチリと塞がれており、魔女の言葉通り一滴も漏らすことができない。

腸と膀胱が直結したように次々と薬液が送りこまれ、前の肉袋がさらに膨らんでいく。排泄欲がわずかに退くものの下腹は張りつめ、今度は排尿欲が際限なく膨らんでいく。そうする間にも、浣腸液がどぶどぶと追加され、弛んでいた便意さえ再燃させられる。

「ひああつ、こんな、こんなこと……耐えきれない……っ」

沙枝は蒼い顔を朱色に戻して、逆さの頭に貼りつく帽子を振り乱した。

渾身の力で逃げようとしたが、膝小僧と脛が掴まれているために、白いストッキングで締まった脚が曲げられない。倒した上半身を上げることができず、頂点で恥ずかしく剥き出しになったお尻を引っこめることもできない。

また尻房がぐちゃりとX字に割られ、肛門と膣口を横に伸び広げられた。

それでも沙枝はうめくように泣いてお尻を暴れさせたが、頂点の肛門では、聞きわけのない赤ん坊に無理矢理ミルクを飲ませるように、びゅくびゅくと浣腸の注入が続けられる。じわじわと増していく腹痛で、沙枝の全身にどっと冷や汗が浮かんだ。

☆

三分の一。五百ccを注入されたところで、とうとう沙枝は限界に達した。今にも肛門から吐き出してしまいそうになり、息も絶え絶えに懇願する。

「ルールアンさん、もう無理です……破裂しちゃうっ」

「大丈夫よ。変身中は身体の中も丈夫になってるから。もつとも、苦しさは普通に感じるでしょうけどね」

便意に耐えきれず、弱々しく羞恥の言葉を発してしまった。

「……トイレ……もうトイレに行かせて……ください」

少女は、心の底から真っ赤になった。

「トイレに行く必要なんてないのよ。沙枝ちゃんはこの繁華街の真ん中で、大勢の人に見られながら、おしっこの穴で全部の薬液を排泄するんだから」

そう笑う間にもチュルチュルと注入が続けられ、下腹がさらに張っていく。

沙枝の瞳から、また大粒の涙がこぼれた。気が弛まり、「んんっ」と恥ずかしく息んでしまうが、魔法がかかった薄桜色の肉皺は、浣腸器をくわえたまま開かなかつた。

「ふふっ。浣腸されてる沙枝ちゃんのお顔、もの凄く可愛いわ。そうだ。辛そうだから、みんなで気持ちよくしてあげる。これで、少しは楽になるでしょ？」

沙枝を拘束している屈強な五人の男が、開いた手を伸ばして柔肌の蹂躪を開始した。

靴から伸びる両足首に二本の手が触れ、濡れてすっかり透明になったストッキングを、敏感な内腿までさわさわと撫で上げていく。太腿やふくらはぎが乳房のようにこねられる。男の指が食いこむたびに、純白の布地に染みた蜜と尿がグチュグチュと浮かぶ。

コスチュームの両脇が揉み掴まれ、陰唇を觸るようにくすぐられる。

怖氣立つて一層背を丸めると、腰で裏返る淡桜色のペチコートがずり下がり、背中まで露わになってしまった。すかさず、肌に凹み伸びる背骨のラインを執拗になぞられる。

赤い上着の壊れたファスナーから手が滑り入り、肛門を拡張するように指先が臍をほじくる。ぽこんと膨らんだ下腹の発育ぶりを愛おしげに撫でさすられる。

「く、ひうつ、おへそ触らないでください、お腹も……押さないで、苦しい」

おぞまじさが膨らみ、振り乱した両乳房を、沙枝のブラジャーのカップほどに大きい二つの手の平が包む。キュッキュツと乳をせがむような揉みこみが始まり、柔らかい胸肌が無限に形を変える。桜色の膨らんだ胸先が、蠢く肉ブラの中で様々な文字を描く。

沙枝は、唇から垂らした舌を震わせて泣き叫んだ。

「胸っ、胸、触らないで……あう……、くう……も、もう揉まないでくださいっ！」

「どう？ こんな恥ずかしい格好でじわじわと浣腸されながら、知らない男たちに身体を弄ばれる感想は。そんな可愛らしく震えちゃって、よほど気持ちがいいのね」

「ち、がいますっ……やう……恥ずかしい……くっ……もう放してください、お願いで——ひっ！」

躍動する両乳首が優しく摘まれた。こよりを作るようにクリクリと指先で弄ばれ、桜色に色づく乳輪が引かれて、さらにぷっくりと張りつめる。

包皮を根本にずり下ろして膨らむ陰核を、キュツと無造作に摘まれた。



「ひあつ！　そこ直接触らないでください、痛い……ひゃうっ？」

跳ね上がった尻がより深く浣腸器に埋まる。魔女が低く笑い、容器の先で肉皺をグリグリとこね回してきた。尻を下げようにも、剥けた陰核を指先でくりくりと転がされては、「ひゃう、ひゃう」と叫びながら先端が根本まで挿入されるほど肛門を押しつけるしかない。こね回る先端からは、ビュクビュクと焦らす注入が続いている。

「んあああつ、許してっ……も、もう、浣腸はひゃだあつ」

揉まれ続ける乳房を揺らして抵抗すると、また尻房がぐちりとX字に割られた。鷲掴んだ四本の手も蠢き、臀部の肉が二十本の指の間で柔らかかそうにグチュグチュと踊る。

凄惨な愛撫の影響で煮こまれた蜜壺が、膀胱と腸の肉風船に前後から圧迫され、処女膜の穴から閉め忘れた水道のようにドロドロと粘液が垂れてくる。

X字に伸び広がる陰唇の奥ひだを、男たちが寄ってたかって無造作に撫で回し、手の平一杯にすくった蜜を、汗だくになった全身に、泣き濡れる頬にまでべったりと塗ってくる。沙枝の全身から蜜の湯気もわりと立ち上り、甘酸っぱい匂いが脳まで染み入っていく。お尻に刺さった浣腸器の射精は、なおも止まる気配すらない。

「こんなの嘘お：やぐっ：もう：やだあつ：あう：お家に、帰してください、んんっ」  
沙枝はもう本当に、気が狂いそうになった。

☆

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**